

うきたむ

第15号

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館館報

山形県東置賜郡高畠町大字安久津2117 TEL0238-52-2585
FAX0238-52-4665

2000.5.20



▲遺跡の旅 下野国分寺跡にて

展示資料から

生活をさぐる

山形県立うきたむ風土記の丘考古資料館
館長代理 今井四郎右衛門

今を生きる人にとって過去のことは、自分の生きてきた程度の長さを振り返り思い浮かべてしまいます。それが大正時代だったり、明治時代だったりするとかかなり前のことのように思い江戸時代以前になると昔のことのように考えてしまいます。まして、縄文の時代などとなると今の物の豊かな生活からは想像もつかない生きるためのギリギリの人々の生活を連想致します。しかし、よく展示資料を調べてみると意外に食生活も豊かで、発想もいろいろ。土器ひとつとっても形・模様等ひとつとして同じものはなく、稲の栽培技術が大陸より伝えられる以前の日本は、そう人口は多くなく、自然の中にあるものを生活の中に取り込んで生きていたように思う。保存食として鮭やマスや野獣、鳥などの肉を干したり、栗やクルミや肉を細かくして練り合わせ、たき火で焼いた石皿の上でクッキー状に焼き上げ保存したりし、自然の中で必要な物を必要な分だけ採り、多くの蓄えを必要としない社会が今からおよそ2400年以前の長い人々の生活の中に取りました。

ゆったりとした時間の流れ、争いの少ない日常、心豊かに自然との一体の中に生きた人々の暮らしを展示している資料から想像します。

日頃忙しく生きる私たちに、ちよつと立ち寄り過去を振り返る契機になるような気軽に入れる資料館を目指していきたいと思えます。

みんなで育む考古資料館

充実したわかる展示

楽と美の手づくり教室

知の世界へさそろうセミナー

私たちの考古資料館は、開館8年目を迎える。みんなに開かれた、全国に山形の情報を発信できる資料館として、そして地域に根ざした施設として一層の充実を目指している。いろいろなイベントに、多くの方々の参加を期待している。

企画展は

「縄文終末のすがたを探る」

10月1日より11月末に開催される企画展は、縄文の最後を飾る山形の「亀ヶ岡文化」に焦点をすえる。村山市宮の前から発掘された豊富な遺物を展示する。一万年続いた縄文文化のもっとも完成された姿はどのようなものなのか。なぜ弥生文化に移ったのか。いまの東北を考える鍵がきっと発見できるだろう。

パネル討議が行われる。

手づくりの

体験教室

野焼きによって縄文土器をつくる焼物教室が6月10日・11日、8月19日・20日の2回にわたって行われ、10月29日に野焼きがすべて完成。

古代のアクセサリ「勾玉」づくりの教室が7月30日、また「縄文の布を編もう」が11月26日。世界にたった一つの私の「たから」を作ってみよう。

縄文まつりも

盛大に

縄文の豊かな世界にたちかえり、縄文太鼓のリズムにとけ込んで、思い切り自己を表現してみよう。縄文のグルメづくりから始まり、解放された原始の世界にひたってみよう。縄文文化を愛するすべての人々の祭りである。9月10日2時より開催される。

セミナーは

「奈良・平安の考古学」

県内でもっとも多く発掘

されている奈良・平安時代の考古学について学ぶ。8月20日から9月24日まで。第一線で活躍している研究者を講師に迎えて、官衙・集落・生産遺跡・建築・仏教などについて、全国的視野からのわかりやすい講座が行われる。

遺跡めぐりの旅

6月3日は、山形市西部から山辺・中山にかけての古墳などを中心とした遺跡めぐりを、7月8日〜9日は、北上市から秋田市にかけて「古代の北方世界を訪ねる旅」を予定している。泊まりながら、ゆつくり東北の古代文化にふれながら語り合うのも楽しい。秋の遺跡めぐりは、米沢市南部を予定している。多くの参加を期待している。

「うきたむ考古の会」

に入会しませんか？

「うきたむ考古の会」は、「考古に学び、考古に遊ぶ」をモットーとした自由な会です。考古を愛する誰もが入会できる会です。遺跡めぐりや講演会の他、会誌「うきたむ考古」を年1回発行しています。多くの方々のご入会を歓迎します。

■お申し込み■
会費 2,000円

県立うきたむ風土記の丘考古資料館

▶ 縄文まつり1996年



遺跡ウォーキングのすすめ

ウォーキングの効用

最近、手を振りながら大股に歩いている人たちと出会うことが多くなった。歩くことが健康のためにとてもいいということが人々の間に広まってきたことを感じさせてくれる。

なるほど日常の生活の中で歩くことが少なくなった。車社会だからであろう。そのつかけが、足腰の弱さ、肥満、ストレス、生活習慣病への引き金となる。縄文人には、そのような心配はなかった。誰し



▲遺跡を歩く。南陽市蒲生田山2号墳

もが、一定の年齢に達すると寝たきりになりたくない、ボケになりたくないという切実に思うらしい。

そのために、ウォーキングは誰でもできる金のかからないもつとも効果的な方法かもしれない。

遺跡を歩く

ただ歩くよりも、自然を観察したり、景観を味わったり、遺跡を訪ね歩くのは何倍も楽しい。健康にも良いし、また勉強にもなり、心に安らぎを憶えるから一石二鳥である。

私は年に何十回となく遺跡を歩く。一人の場合がどちらかというも多いが、気の合った仲間数人で行く。遺跡の前であてもない、こうでもないという意見は言い合ひ、夕方は温泉につかって疲れをいやし、酒をくみ交わしながら考古談義に花を咲かせる。私にとつて至福の時である。

この頃山城を一人で歩く

ことはやらないことにした。熊に出会うのも恐ろしいが崖から転げ落ちたり、蜂に刺されたり、また友人の一人は曲輪から飛び降りて下の肥溜に入ってしまったことがある。けがはしなかったがずつと臭くて閉口した。

そんなことを思いながらも、今日また午後から山城の調査をやつてきた。山城は、葉が茂る前の春先が一番いい。空濠や土塁、曲輪がよく見えるからだ。この機会を逃したら、また一年待たなければならぬ。そんな思いで、オオイヌノフグリやホトケノザ、ハコベなど野の花に心をなごませ崖をのぼった。

高島の遺跡めぐり

私たちの資料館では、毎年4月中旬に職員の研修ということで、高島町の主な遺跡を一日がかりでめぐって行く。私たちの経験から、テーマ別にいくつかのコースを提案しよう。

■古墳めぐり■

考古資料館→小郡山ストーンサークル→金原古墳→清水前古墳→安久津八幡→鳥居町古墳群→源福寺古墳群→羽山古墳

朝8時頃出発すればお昼過ぎ羽山公園で弁当開きということになる。

■洞窟遺跡めぐり■

観音岩→蛭沢湖→神立沢→一の沢→(ぶどうまつたけライン)→火箱岩→日向洞窟→大立洞窟

半日のハイキングに好適。原始の気分にあたかえる。

■中世石造文化財めぐり■

(1日コース)

高房神社(天文の石鳥居・大永の納経碑)→滝の下六面幢→亀岡文殊(近世の石碑・石仏・一の宮弘治の六面幢)→塩の森六面幢→蛭沢入り口の石籠仏→安久津八幡宮ジジ・ババ石他→羽山南の永仁板碑→竹の森山弘安板碑→夏刈資福寺跡(六面幢・板碑群・近くの長谷川家墓地に弥陀三尊画像板碑あり)

これは車を使わないと一日は無理だろう。

いずれも3〜4時間位のウォーキングコースである。

■石仏めぐり■

二井宿の奥の小湯山のいたるところの岩窟に、近世から明治にかけての小石仏が安置されている。その数は400体をこえる。ここをめぐると3時間は必要だ。

観音岩も最近刻まれた石仏をはじめ、戸田半七の製作にかかるものなど幕末から明治期にかけての石仏が多い。ここはざっと巡って1時間を要する。

考古資料館の前にウォーキングセンターがオープンした。シャワーや更衣室を備え、レストランも開いている。豊かな自然と文化財にふれながらウォーキングを試みてはどうか。



▲オープンしたウォーキングセンター

発掘された

米沢城二の丸

米沢市は、江戸時代上杉氏15万石の城下町である。今年の大連連休にも「上杉まつり」に大勢の人々が集まりにぎわった。メインイベントは、松川の河原で演じられる「川中島の合戦」である。

米沢市は、江戸時代に新しく博物館がオープンする。それに先立って、一昨年山形県埋蔵文化財センターと米沢市教育委員会によって建設敷地内の発掘調査が行われた。

棧のようにみえるので障子堀と呼ばれている。これは濠を渡る敵の移動を阻む施設である。堀底あたりからは、漆器や下駄などの木製品、瀬戸、美濃、肥前産の陶磁器、使い捨ての酒器であった「かわらけ」、古銭、脇差など金属製品も発見された。かわらけには「正福院」や「寛永」など墨書があり、17世紀代のもので多く出土した。濠の岸には杭列もたくさん見つかった。

来年は藩祖上杉景勝が一六〇一年(慶長6年)に米沢に入部してから四〇〇年になる。多彩な催しものが予定されているが二の丸の旧県立米沢工業高校敷地

調査地は、本丸である上杉神社の建っている正面道路南側の一万㎡が対象である。このあたりは、米沢城二の丸の東にあたり、市立図書館蔵の享保10年の「御城下絵図」によると「正福院」などの寺院と東側に二の丸を画する濠があった。

いま当時の面影を伝えているのは本丸をめぐる濠のみである。米沢城は三の丸まで濠によって囲まれていたことはかつての絵図などによってわかるが、二の丸や三の丸の濠はすべて埋められて、その上に市街地が形成された。

絵図の通り、幅40メートルの遺跡が一〇〇メートルにわたってみごとに姿を現した。しかし、堀の底は縦横格子状に畝が残されていた。障子の

寺院があった西側からは、堀立や礎石の建物跡、井戸跡流水遺構、土壘などが検出された。金粉を塗ったかわらけや、中国の明から輸入された陶磁器もあり、主として17・18世紀代のものである。しかし中世や古代の土器もみられ、米沢城築城以前に、人々の居住があったことを示している。



▲米沢城東二の丸の障子堀

米沢城が整備されるのは、上杉氏が米沢を領有するようになってからで、重臣の直江兼続が直接城下町づくりにな

あつた。鎌倉時代に長井氏、その後伊達氏が城を築いたというが確かではない。16世紀末に短期間領有した蒲生氏の

頃から、米沢城と城下町が徐々に整えられていくことになる。

我が館の展示品⑥

三累環頭

常設展示室の古墳コーナーの片隅にひっそりと置かれている。館の東側にある安久津一号墳から昭和20年代前半に出土したもの。青銅製、三つの環を重ねたもので、その下に刃の茎部を挿しこんだ扁平型の筒金がある。全長4・5センチの小さなものである。刃の柄の先に付けられた装飾具である。韓国においては、5世紀より7世紀にかけて長い間、王や権力者たちの威儀具的なものであった。日本では、他の環頭に比べると意外に出土例が少なく、28例が報告されている。

東北地方では、郡山市田村町枇杷塚古墳から出土した金銅製のものが知られているが、これは紛失して現存しない。したがって、これが東北地方では現存する唯一のものになるのか。

日本では、6・7世紀の古墳から



の出土例が多い。これも百済や新羅などで製作された舶載品の可能性がある。

その傍らの靴尻金具は8世紀代のもので、三累環頭大刀と対をなすものではない。